

「中1ギャップ」の解消に向けた小学校における教科担任制の効果の検討

— 学級担任制で学ぶ児童との意識調査の比較を通して —

A Study on the Effects of the Subject-based teacher assignments system in Elementary Schools to Solve the “Chu-ichi Gap”

— Comparison with the Attitude Survey of Children in the Class-based teacher assignments system —

次世代教育学部教育経営学科

浅田栄里子

ASADA, Eriko

Department of Educational Administration

Faculty of Education for Future Generations

広島大学附属小学校

中西 紘士

NAKANISHI, Kouji

Hiroshima University

Attached Elementary School

Abstract : The aim of this study is to investigate how children, who are accustomed to the subject-based teacher assignment system in their elementary school days, feel about their life as junior high school students, and to examine whether this system can be effective to solve the “Chu-ichi Gap.” According to the results of questionnaires, it turned out that children in the subject-based teacher assignment system are less likely to feel anxious than those in the class-based teacher assignment system. In particular, junior high school students’ anxieties toward learning and teachers make a huge difference between the two groups. As previous studies have pointed out, the subject-based system can lead to the *understanding of learning*, one factor of “Chu-ichi Gap.”

Keywords : Chu-ichi Gap, the Subject-based teacher assignments System, the Class-based teacher assignments System, *Understanding of learning*

研究の背景

いわゆる「中1ギャップ」について、中央教育審議会初等中等教育分科会学校段階間の連携・接続等に関する作業部会（平成24年）の「小中連携，一貫教育に関する主な意見等の整理」の中で「各種調査によれば、『授業の理解度』『学校の楽しさ』『教科や活動の時間の好き嫌い』について、中学生になると肯定的回答をする生徒の割合が下がる傾向にあることや、『学習上の悩み』として『上手な勉強の仕方がわからない』と回答する児童生徒数や、暴力行為の加害児童生徒数、いじめの認知件数、不登校児童生徒数が中学校1年生になったときに大幅に増える実態が明らかになっている。」としている。この報告からは、中学1年生で課題となることとして、学習における課題と学校生活における課題の2点が考えられる。一般的に小学校においては、学級担任制で授業が行われる。しかし、中学1年になったとたん、教科担任制による授業

へと変更される。学習内容の難易度が上がることに加え、それぞれの教科担当の教師の授業の進め方の違いによる戸惑いも少なからずあるのではないかと考える。また、学校生活における課題では、常に教室に担任教師がいる小学校と違い、生徒たちだけで過ごす時間が長くなる中学校生活になることによる友達とのトラブルの増加も予想される。

また、平成24年度から平成26年度の3年間に入学した2校の新中学1年生を対象として、中学校適応状況の調査を行った中村ら（2016）の研究では、いわゆる「中1ギャップ」といわれる問題の要因として、「学習の理解」と「思春期心性」の2つの側面が明らかとなった。先に挙げた「小中連携，一貫教育に関する主な意見等の整理」でも挙げられた学習における課題ともう一つこの時期の発達段階による課題も明らかになった。

このように、小学校から中学校へと進学することで、それまで築き上げてきた学校生活のリズムが大幅

に変更されることにより、学習における課題や学校生活の課題、そして、思春期による心の課題が増加することが大きな問題であるとされている。これは、中学校だけが取り組むべき課題ではなく、小学校において中学校で起こりうるこれらの課題にどのように対処すべきかを明らかにする必要があると考える。そのため、小学校と中学校の大きな違いである教科担任制によるこれらの課題との関係を調べ、小学校における教科担任制による授業の開始の効果について調べていきたいと考える。

1. 「学級担任制」「教科担任制」の定義

(1) 学級担任制とは

学級担任制について日俣（2002）は、「1人の教師が1学級を担任し、各教科指導および生徒指導に責任をもつ教授組織の1形態。担任1人で教室の中での全ての指導を取り仕切っていくことから、学級担任制は自足学級制self-contained classとも呼ばれている。学級担任制は、一般に小学校において採られている方式であり、教科担任制と対比される。学級担任制というのは、包括的に言えば1人の学級担任教師がほぼ全教科に関する学習指導と生活指導を行い、担任学級の経営を行う教授組織である。」としている。一般的に教科担任制で指導が行われている小学校においては、朝のホームルームから午前中の授業、給食指導、掃除指導、午後の授業、帰りのホームルームまで1日中学級の子どもたちとともに生活をしている。時間にして1日8時間、ともに生活をしていることになる。

(2) 教科担任制とは

一方で教科担任制については、日俣（2002）は、「1人の教師が専門とする教科を担当することを原則として、各教師がそれぞれ特定の教科を分担し、教科指導に責任をもつという教授組織の1方式である。」としている。一般的に中学校では、1教科を1人の教師が担当するため10教科で10人の教師が授業を担当することになる。もちろん学級担任の教師もいるが、その教師が担当する授業が無い曜日では、朝のホームルーム、昼食時間、帰りのホームルームしか子どもたちと顔を合わさない可能性もある。

また、小学校においても部分的に教科担任制が行われている場合がある。図1は、木原（2004）がまとめた小学校における教科担任制の類型モデルである。先に述べた一般的な中学校で行われているような教科担

任制を「完全教科担任制」としている。次に、「特定教科における専科の単独指導」が行われている教科担任制を挙げている。これは、最も一般的だと思われる音楽における専科教師による授業が挙げられる。他にも理科や図画工作科、家庭科などでも見られる。これらの教科は、他の教科の場合に比べて、「教師にすぐれた『技能』が必要とされる。」としている。そして、「学級担任間の授業交換」という場合が挙げられる。これは、「学級担任制を基本としつつ、そこに教科担任制の要素を加えるのが、この学級担任間の授業交換である。」としている。1学年において複数の学級が存在する学校において、お互いの苦手意識を感じている教科を互いに請け負う形で教科担任制が採られることがある。さらに、「学級担任とTTを組む専科」という場合が挙げられる。これは、特定の教科の授業を担当するのだが、1人で請け負うのではなく、学級担任とともに授業を行うという形を採るものである。これにより、少人数指導を行ったり、同じ教室で役割分担をしながら授業を行うTTという形も採られたりするなど、様々な授業スタイルが存在する。

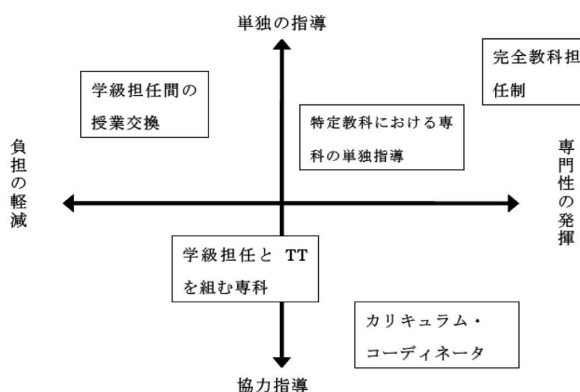


図1 小学校における教科担任制の分類

(3) 学級担任制と教科担任制による長所と短所

学級担任制の長所として、木原（2004）は次の4点を挙げている。

- ① 各教科をまたいで行う合科的指導が可能である。
- ② 授業時間の弾力的運用ができる。
- ③ 教科指導と教科外指導の統合ができる。
- ④ 多面的な児童理解ができる。

学級担任制においては、全ての教科の指導を担当教師が行うため、複数の教科で同じ内容を取り扱って行う合科的指導や45分の授業時間に収まらない学習内容の場合には、時間を延長して行うなど教科指導を弾力的に行うことができる。また、教科指導においても、道徳や特別活動の指導などの指導も合わせて行う場合

がある。また、学校行事に合わせて特定の教科の時間を増やすなどの弾力的運用も可能である。このように、いろいろな面から子どもたちの指導を担っているため、子どもたちを様々な面から理解し、評価することができる。すなわち、子どもたちを多面的に理解することができると言える。

その一方で木原（2004）は学級担任制の課題も挙げている。それは、学級担任による学級王国になってしまうという点と授業の準備に相当の労力を要するという点だ。学級担任制においては、児童は学校で1人の教師としか関わりをもたない。そのため、児童にとって担任教師が権威的な存在になりやすい。そして、全ての教科の授業を1人で行うため、授業の準備には相当の労力を要する。

教科担任制の長所としては、授業づくりに関する教師の負担をある意味で軽減することができる。また、教科担任制による教師たちの「共同性」の向上が期待できるとしている。一方で課題としては、小学校教員のアイデンティティの再構築をサポートする必要があることや教科担任の居場所づくりが必要であること、そして、学級担任との意見交換をするための時間の捻出や調整が必要となってくることを挙げている。

2. 研究の方法

大久保（2005）によれば、従来の学校への適応感研究では、友人関係や教師との関係や学業はどの学校においても等しく価値が置かれ、学校適応に対しての正の影響を与えているという暗黙の仮説をもって研究されてきた。しかし、学校の特徴によって適応状態そのものが異なるため、学校の特徴を把握した上で、学校別に分析を行う必要があることを示唆している。

江村ら（2012）によれば、小学校学級適応感尺度としては、「居心地の良さの感覚」「被信頼・受容感」「充実感」の3因子が抽出され、信頼性、妥当性を有している。また、小学生の児童の適応感は「教師との関係」が正の関連を示すという点で、青年の適応感とは違う特徴を示した。そのため、学校における児童の適応感を検討する際には、学級集団の重要性や学級担任制という小学校固有の制度などの特色を考慮して学級の特徴を踏まえた研究を行っていく必要性が示唆された。

すなわち、小学校においても木原（2004）の区別のような様々な教科担任制を経験している児童がいると考えられる。小学校において「完全教科担任制」を経

験してきている児童が中学校1年生を迎えるに当たり、どのような不安や学級適応を示しているのかを明らかにすることで、小学校における中1ギャップの緩和への方策を示唆することができるのではないかと考える。

調査方法

(1) 調査：平成29年度の9月に実施

対象：62人：A小学校6年生（1年生から教科担任制を経験している児童）

(2) 調査項目：EASY（小学生版）

(3) 倫理的配慮

この調査は個人相談で使うとともに、研究で使わせてもらう場合があり、研究で使う場合、個人情報ともれないように十分配慮することを口頭で説明し、文書を保護者に配布した。

結果

有効回答数61人（1名欠席）であった。

3. 結果と考察

小学校1年生から教科担任制で授業を行っているA小学校において、EASY（小学生版）を実施した結果、以下の様な結果が得られた。

3.1 山口県平均とA小学校との比較

3.1.1 学習に対する不安の軽減

学習に対する不安は、一般の学級担任制で学習を行っている山口県の平均は3.0なのに対し、小学校1年生から教科担任制で授業を行っているA小学校は2.3であった。一方、学習に対する期待については、山口県平均が2.7なのに対し、A小学校は2.65とほぼ同等の結果となった。学習に対する期待については、一般の小中学生と同じくらいの期待を抱いている一方で、学習に対する不安は少ないという特徴が明らかとなった。

不安に対する質問の項目別人数は表2の様な結果であった。A小学校では、6年生になると、中学校進学のための学習内容の定着のため、2ヶ月に1回程度の定期テストが実施される。そのため、中学校で行われるような中間テストや期末テストと同様な形式で行われるテストを経験していることが、一般の小学校よりも不安が低い結果につながっているのではないかと考える。また、受験に対する不安についても、ほとんどの児童が中学校受験を経験するA小学校においては、中学校受験と高等学校受験の違いはそこまで意識してい

ないのではないかと推察する。もちろん不安を感じているのだが、中学受験と比較して、高等学校受験に対して大きな不安を感じているものではないと推察する。

3.1.2 先生に対する不安・期待に関して

先生に対する不安は、山口県平均は2.7なのに対し、A小学校では2.0であった。一方先生に対する期待に関しても山口県平均は2.4なのに対しA小学校は2.3とほぼ同等の結果となった。ここでも、A小学校において、先生に対する期待は同じくらい抱いているのに対し、不安については軽減されていることが推察される。これは、小学校1年生から教科担任制で授業を行うことで、学習や先生に対する不安を軽減することができるが示唆されていると考える。質問内容別の回答を見ても、先生の授業の進め方についての不安は0.72と極めて低い数値を示している。これは、教科担任制で授業を行っているA小学校において、各教科担任による授業の進め方の違いに慣れているため、授業ごとに先生が変わる授業スタイルに対するイメージがもてていることが要因として考えられる。中学生になったとたん突然教科担任制に変わる一般の小学生に対して、小学校1年生から教科担任制の授業スタイルで学習してきた子どもたちにとって、不安に感じる要因が少なくなっていると推察する。

表1 学習に対する不安と期待

学習に対する不安と期待	不安	期待
山口県平均	3	2.7
A小学校	2.32	2.65

表2 学習の不安に対する質問の項目別人数

	そう思わない	少しそう思う	とてもそう思う
テスト回数の多さ	11人	21人	29人
受験の悩み	17人	25人	19人

表3 先生に対する不安と期待

先生に対する不安と期待	不安	期待
山口県平均	2.7	2.4
A小学校	2.04	2.32

表4 先生の不安に対する質問の項目別人数

	そう思わない	少しそう思う	とてもそう思う
授業の進め方の早さ	25人	28人	8人
先生の厳しさ	10人	21人	30人

以上のことから、小学校で教科担任制を導入することで、「中1ギャップ」の大きな原因とされている中学校に上がったときの学習や先生に対する不安を軽減する効果が示唆された。

3.2 兄弟がいる群と兄弟がいない群における比較

先行研究では、「兄弟あり群」と「兄弟なし群」で回答を比較すると、「兄弟あり群」の方が全体的に不安が低いとされていた。そこで、A小学校においても、「兄弟あり群 (n=21)」と「兄弟なし群 (n=40)」において比較を行ったところ表5の様な結果となった。

表5 「兄弟あり群」と「兄弟なし群」による不安に関する比較

	学校生活	規則	学習	先生	友達や先輩	部活動
兄弟いる群	2.00	1.90	2.57	1.95	1.23	1.19
兄弟いない群	2.13	2.25	2.20	2.10	1.53	1.45

先行研究と同様に、「兄弟あり群」の方が不安が低いという結果であった。しかし、学習に関する結果については、「兄弟あり群」の方が不安が高いという結果であった。この点については、兄弟から情報を得ることができることが、良い面にも悪い面にも働く可能性があることが推察される。情報が多く入ることで、不安が少なくなる項目がある反面、学習面に関しては、自分自身が中学校の学習についていけるかどうかという不安をもつことが示唆された。実際に自由記述の欄には、「中学校の授業についていけるか」ということや自分の苦手とする教科に対する不安について記述されていた。教科担任制における先生との関わりや学校生活のリズム等は、実際に自分で経験している上で兄弟から情報を得ることができるため、不安が少なくなるのではないかと推察する。学習に関しては、実際のテストや学習内容について経験することができないことと、中学生になると、試験週間という特別な時間割が編成されることも小学校との違いを意識してしまう要因ではないかと推察する。

4. まとめ

本研究では、一般的な学級担任制による小学校と教科担任制による小学校の中学校に対する不安や期待を比較することで、教科担任制を採用することによる

「中1ギャップ」の解消の効果について明らかにすることを目的とした。アンケート結果から、教科担任制を経験している小学生は、学習や先生に対する不安が学級担任制を経験している小学生に比べて低いことが明らかとなった。「中1ギャップ」の主な要因の1つとして挙げられている「学習の理解」(中村ら, 2016)の解消に効果が認められた。一方、先行研究で明らかにされていた、「兄弟あり群」の方が不安が少ないという傾向も認められたが、学習面に関しては「兄弟なし群」よりも不安が高いという結果となった。しかし、学級担任制の小学生と比較すると「兄弟あり群」も学習に関する不安は少ないという結果であったため、教科担任制が「中1ギャップ」の解消に少なからず寄与できるのではないかと推察された。

全面的に教科担任制を採用することは難しいが、木原(2004)がまとめた教科担任制の類型モデルを参考にしながら、今後、多くの小学校で採用できる教科担任制の在り方を探っていくことが今後の課題として挙げられる。

引用・参考文献

- 中央教育審議会初等中等教育分科会学校段階間の連携・接続等に関する作業部会(平成24年)「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」
- 中村仁志, 太田友子, 丹佳子, 福田奈未(2016)「中1ギャップ」における問題と背景-小学校から中学校への接続における生徒の困り感について-『山口県立大学学術情報』第9号, pp.87-92.
- 木原俊行(2004)「小学校における教科担任制の新展開」小嶋邦弘編『確かな学力をはぐくむ教育組織の多様化・弾力化』ぎょうせい pp.88-96.
- 日俣周二(2002)「学級担任制」安彦忠彦他編『新版現代学校教育大事典1』ぎょうせい pp.423.
- 日俣周二(2002)「教科担任制」安彦忠彦他編『新版現代学校教育大事典2』ぎょうせい pp.348-349.
- 大久保智生(2005)「青年の学校への適応感とその規定要因-青年用適応感尺度の作成と学校別の検討-」『教育心理学研究』第53号, pp.307-319.
- 江村早紀, 大久保智生(2012)「小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連:小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討」『発達心理学研究』第23巻第3号, pp.241-251.
- 山口県教育委員会「EASY(小学校版)」<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50500/manual/futoukoutaiou.html>